

SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS

No. 164 March 2022

研究の最前線

◆ 長縄宣博教授が日本学術振興会賞と日本学士院学術奨励賞を受賞 ◆

センターの長縄宣博教授が、「ロシアとイスラーム世界の絡まり合いについての総合的研究」というテーマで、第18回(令和3年度)日本学術振興会賞と日本学士院学術奨励賞を同時受賞することが発表されました。長縄教授は、これまでの研究成果をまとめた『イスラームのロシア: 帝国・宗教・公共圏 1905-1917』(名古屋大学出版会)の出版により、第8回三島海雲学術賞(2019年度)、本学の教育研究総長表彰(2020年度)を受賞されていましたが、このたび若手研究者にとって最も栄えある日本学術振興会賞と日本学士院学術奨励賞の受賞により、その成果が国際的にも一級品のものであることが証明されました。

日本学術振興会賞の受賞は、本学としては12人目の狭き門ですが、人文社会系の本センターでは3人目の受賞となります。長縄教授への授賞理由は以下の通りです。「長縄氏の研究は、20世紀前半、ロシア帝国論とムスリム社会論が交差する、ヴォルガ・ウラル地域の、タタール民族社会に焦点をあて、ロシア語、タタール語など多言語史料を駆使し、とくにロシア帝国内におけるムスリム・コミュニティの宗教と、現実的な共同体秩序の両面から考察している。このような着眼点は世界的に極めて独創的であり、長縄氏の『ロシアのなかのムスリム』論はすでに世界の学界で認知され、・・・今後ロシア史研究の分野において世界を牽引する研究者として更なる発展が期待できる」。また、日本学士院学術奨励賞は、日本学術振興会賞受賞者25名のうち、今後の活躍が特に期待される6名に授与されることが決定しました。

長縄教授は、2021年10月から東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所とのクロスアポイントメントをもとに、中東学、イスラーム学と本センターのスラブ・ユーラシア学を接合する新しいプロジェクトを立ち上げようとされています。この研究プラットフォーム「生存戦略研究」は、地域を超え、人文系の諸学問を総合するものであり、部局を超えた本学教員の参画も予定されています。本センターは本学の人文社会研究の発展に向けて、今後とも尽力していきます。[岩下]

◆ ロシアによるウクライナ侵攻への対応 ◆

ロシアによるウクライナ侵攻という事態に直面し、センターの研究者は侵攻開始の翌日である2022年2月25日に、以下のような緊急アピールを発表しました。

私たちはロシアによるウクライナ侵攻に断固として反対します

私たちスラブ・ユーラシア研究センターの研究者は、2022年2月24日に開始されたロシア軍によるウクライナ侵攻を断固として非難し、脅威にさらされているウクライナの市民、および戦争に反対するロシアの市民との連帯を表明します。

We are resolutely opposed to Russia's assault on Ukraine.

Researchers of the Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University, are united in our condemnation of Russia's unprovoked military assault on Ukraine, which began on 24 February 2022. We stand with the citizens of Ukraine whose lives and livelihoods have been placed at risk by this invasion, as well as with those brave citizens of the Russian Federation currently voicing their opposition to Russia's actions.

3月4日からは、ウクライナ侵攻に関連するセミナーを次々と開催しています。また同日、ウェブサイトの「研究員の仕事の前線」に「ロシアのウクライナ侵攻特集」コーナーを設け、この問題についてのセンター専任研究員、共同研究員などの論考・コメントを順次掲載しています。
https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/essay/20220302_j

また北海道大学としても、総長が2月28日にメッセージを发出し、広報課や科学技術コミュニケーション教育研究部門（CoSTEP）もセンターと協力しながらこの問題に関する知見の発信に取り組んでいます。

核兵器を持つ大国が隣国に一方的かつ大規模に侵攻するという事態は、ウクライナとロシアの人々の生活と国のあり方に重大な影響を与えるのはもちろん、ロシア・旧ソ連地域研究の環境に深刻な変化をもたらし、研究態勢や国際学術交流のあり方に見直しを迫りうるものです。センターでは、今回の侵攻とその背景の分析、日本と国際社会がとるべき態度などについて積極的に発信して、研究者の社会的責任を果たすと共に、この厳しい状況下でロシア・旧ソ連地域研究が進むべき道を、国内外の研究者コミュニティと共に考えていきます。[編集部]

◆ 「生存戦略研究」の始動 ◆

われわれが現在まで持続可能な発展の大前提としてきた世界秩序が未曾有の岐路に立っています。その起源は19世紀末に西欧の諸帝国が地表を覆った時代に遡ります。西欧諸帝国は、植民地支配など負の側面を持ちながらも、民主主義、人権、多文化主義、自由貿易、移動の自由、グローバリゼーションなど、リベラルな価値観や公共財を発達させ、世界の秩序維持に努めてきました。しかし今や、その中核を担ってきた（と自負してきた）欧米の住民が、それらの価値や制度はもはや自分たちの割に合わない（と主張し、従来の世界秩序の周辺に位置してきた地域が自律化の傾向を強めています。この現象にスラブ・ユーラシア研究者は既視感があります。ロシアでは20世紀のうちにロシア帝国とソ連という二つの帝国が解体しました。よく知られているように、その

時にもほかならぬロシア人が、帝国を維持することに不公平感を表明しました。ソ連解体から30年を迎えた現在、アメリカは唯一の超大国から自国第一主義に凋落し、現役大統領が選挙という民主主義の根幹を否定する事態にまで陥りました。多くの研究者はソ連解体で20世紀が終わったと論じてきました。しかし、西欧の諸帝国が世界秩序を維持した「長い20世紀」は、今まさに終わろうとしているのではないのでしょうか。

スラブ・ユーラシアは20世紀の世界秩序の周辺にあったものの、欧米との相互作用は世界の動態に多大な影響を及ぼしてきました。そして現在ロシアは、2014年のクリミア併合、2015年のシリア介入、2016年のアメリカ大統領選への介入、そして現在のウクライナ侵攻など、欧米中心の世界秩序を揺るがし、今後の世界秩序・無秩序を左右する存在になっています。また、かつてヨーロッパへの統合を切望していた中東欧諸国は、今やEUの秩序を内側から揺さぶる存在になっています。中央アジア諸国は、盟主でありたいロシア、台頭する中国、影響力を確保したい欧米・日韓の間で巧みに立ち回っています。翻って、これまで欧米に依存し20世紀的な経済発展で成功した日本は、欧米自身が従来の秩序を維持できなくなっている今、どのような立場を取るべきでしょうか。

このような認識に立ってセンターでは、国立大学の新しい中期計画が始まる2022年度から5年間、「生存戦略研究」というプロジェクトを立ち上げ、センターの研究活動の再定義を試みます。センターは日本で唯一、ロシアとその周辺というユーラシア大陸の広域秩序の変動を追跡してきた立場から、この空間の多様な人間集団の経験と教訓を参照軸としながら、現代世界の変動を観測し、情報発信していきたいと考えています。日本ではどうしても米中対立が前景化しますが、現代世界の危機が日本人の世界認識の裏側といえる地域でも生じていることを深刻に受け止めるために、このプロジェクトではロシアと中東を柱の一つに据えることにしました。われわれの専門は、旧ソ連・東欧ですので、ヨーロッパとの関係は研究内容に織り込み済みです。また、NIHUの北東アジア研究で拠点になったように、ロシアと東アジアとの関係は従来から強みをもっていました。しかし、現代世界における戦争と平和を左右しているともいえる、ロシアと中東を同時に捉えるような視座は、日本では依然欠けています。「生存戦略研究」では、このような全方位の視座からスラブ・ユーラシア研究の意味を問い直し、日本のスラブ・ユーラシア研究のなしうる独自の貢献を模索したいと考えています。これは、われわれの専門領域自体の生き残りにも関わっていますので、関連の研究会や教育プログラムへの皆様の積極的なご参加とご助力に大いに期待するところであります。[長縄]

◆ 令和4年度からの共同利用・共同研究拠点に継続認定される ◆

センターは、令和4年(2022年)4月1日～令和10年(2028年)3月31日の期間における共同利用・共同研究拠点に継続認定されました。関係者の皆様のご支援にお礼申し上げます。[岩下]

◆ 2021年度冬期国際ワークショップ「権威主義的統治の制度と戦略」開催 ◆

前号で予告した通り、2021年12月8日(水)～10日(金)に冬期国際ワークショップ“Authoritarian Governance: Institutions and Strategies”をオンラインで開催しました。3つのセッションを通して、権威主義体制のもとでの地方政治、社会制度、抑圧、腐敗などの実態を、理論と実証の両面から分析する方法が議論されました。権威主義体制の民主化について提起された新しい見方や、コロナ禍への対応でいくつかの国の強権的な体制が露呈させた統治能力の低さに関する分析は、特に刺激的でした。

最近の国際政治においては、権威主義体制への批判が大国間競争に利用されたり、逆にコロナ禍への対応が権威主義体制の正当化に利用されたりして、単純な議論が横行しがちですが、権威主義体制の多様性および強さと弱さを的確に把握することの重要性が、このワークショップで改めて確認できました。参加者は実数で77人、3日間の延べ人数で125人にのぼり、活発な議論が行われました。[宇山]

◆ 【北大総合博物館展示】「ボーダーツーリズム」リニューアル ◆

境界研究ユニット(UBRJ)は、2021年10月26日から北海道大学総合博物館(2階ブース)の展示内容をリニューアルしました。今回のあらたな展示は、「国境観光—内なるボーダーを求めて—」と題し、閉ざされた空間で生み出す境界を越えて、向こう側と繋がる新たなボーダーツーリズムのかたちと可能性を考えるものです。新コンテンツは、「知られざる境界のしま・奄美」を軸に構成されています。展示会場設置のモニターでは、2020年2月～3月に催行された境界地域の旅の記録「知られざる境界のしま『奄美』を訪ねて」を放映中です。旅の軌跡を振り返りながら、民謡日本一の実力をもつ奄美の唄者・中村瑞希さんの島唄を堪能することができます。さらに、「世界三大織物」とも呼ばれる伝統工芸品「本場奄美大島紬」(龍郷柄、内山初美氏所蔵)も、公開しています。本ブースのシンボリック存在の日露国境標石も、民族共生象徴空間ウポポイ(国立アイヌ民族学博物館、白老町)に一時貸し出されていましたが、ブースに戻ってきました。

また、稚内市在住の国境写真家・斎藤マサヨシ氏による、写真展「ボーダーツーリズムの魅力『端っから始まる旅』」シリーズの「第1章 北海道稚内からサハリンへ向かう」が始まりました。稚内からサハリンを訪ねて23回、サハリンのほぼ全島を回られたという、斎藤氏の至極の写真20点をお楽しみください。来年以降、第2章、第3章と展示していく予定です。



あらたな国境観光(ボーダーツーリズム)の世界へようこそ!!

境界地域研究ネットワークJAPAN(JIBSN)の設立10周年を記念する特別展

示も、引き続きご覧になることができます。JIBSNのこれまでの歩みと活動、国際チャーター便を使ったボーダーツーリズムを始め、年次集会の様、加盟10自治体からの「イチオシ」物品などもりだくさんの内容です。

ミニ・コーナーもリニューアルし、「どうしてもしょっぱいミルクティーが飲みたい～北東アジアとカルムイク共和国」という企画が始まりました。このコーナーでは、魅惑の塩味ミルクティーから見えてくる、北東アジア地域と中央ユーラシア地域を横断する飲茶習慣を紹介しています。磚茶（たんちゃ）と呼ばれる、レンガのように固く圧縮したお茶の塊も展示してあります。[岩下/井上]

◆ 連携セミナー「ロシア極東：対中国最前線を見る」の開催 ◆

2022年1月24日、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター・公募研究プロジェクト連携セミナー「ロシア極東：対中国最前線を見る」が、NIHU北東アジア地域研究事業・北大スラブ研拠点（NoA）と境界研究ユニット（UBRJ）との共催で開催されました。センターは、共同利用・共同研究拠点として公募による事業を行っています。今回は、その柱の一つである共同研究班「境界・国境研究」に関わる共同研究に関して、セミナーを開催しました。ERINA（環日本海経済研究所）の主任研究員として長年、北朝鮮を中心にしながらも、中国とロシア極東の国境地帯を研究してきた三村光弘さんに、2021年秋のロシア極東における現地調査をもとに、コロナ禍で変容している国境地帯は今、どうなっているのか、グロデコボ、ウスリースク、ハバロフスク、ポリショイ・ウスリースキー島、レニンスコエなどの近況について、ご報告をいただきました。セミナーでは、さらに高塚奈緒さん（NHKウラジオストク支局）、堀江典生さん（富山大学）をゲストコメンテータとして急遽お招きし、活発な議論が交わされました。セミナーの様子は、下記URLから動画でご覧になることができます。

<https://youtu.be/6Q8caMJTwnI> [岩下/井上]

◆ ArCS IIの最初の研究成果の発表 ◆

2020年からの北極域研究加速プロジェクト（ArCS II）のなかで、「エネルギー資源開発と地域経済」と題する研究が、センターの田畑を代表者として始められましたが、このほど、その最初の成果が国際学術誌*Sustainability*に発表されました。これは、北極域におけるエネルギー資源開発が地域経済・社会に及ぼす影響を多角的に分析するための事例研究として、ロシア連邦サハ共和国において石油・ダイヤモンド開発が経済発展にどのような影響を及ぼしているかを分析したものです。研究上の新機軸としては、共和国レベルの統計データだけでなく、地方自治体（36の郡と市）レベルの総生産（Gross Municipal Product）、鉱業生産、財政などのデータを分析し、石油とダイヤモンドでは異なる影響を及ぼしていることを明らかにしたことなどが挙げられます。ArCS IIはコロナ禍で開始され、このような研究では不可欠である現地調査ができない状況が続いていますが、この研究では北東連邦大学（ヤクーツク市）の研究協力者にデータ収集や文献入手などの面での協力を求め、それらを活用して今回の成果を

まとめています。より詳しくは、10月12日に出されたプレスリリースを参照ください。
<https://www.hokudai.ac.jp/news/2021/10/post-915.html> [田畑]

◆ ArCS II 社会文化課題セミナーの開催 ◆

センターが中心となって進めているArCS II社会文化課題のサブ課題「エネルギー資源開発と地域経済」では、「迫られる脱炭素と先住民社会への対応：ロシア北極域で進む石油・ガス開発」と題するセミナーを2月14日（月）に東京（東京証券会館）で開催しました。本サブ課題の中心的なトピックは、北極域においてエネルギー資源開発がどのように行われているか、そして、それが北極域の経済・社会にどのような影響を与えているかということにあります。本セミナーでは、原田大輔氏（石油天然ガス・金属鉱物資源機構、JOGMEC）が「ロシア北極域における石油・ガス開発の現状と見通し」、徳永昌弘氏（関西大学）が「ロシア極北の資源開発と先住民問題：「ヤマルのパラドクス」の分析を中心に」（アルバハン・マゴメドフ氏〔ロシア人文大学〕との共著）と題する報告を行いました。また、昨年来、脱炭素の動きが世界的に盛り上がってきたことから、この影響について、センターの田畑が「世界的な脱炭素のロシア経済発展・北極域開発への影響」と題する報告を行いました。

これらの発表は研究の中間報告と位置付けられるものですが、研究者だけでなく、一般の方々にも聞いていただきたいと考え、都心の会場で対面とオンラインのハイブリッド形式での開催を計画しました。コロナウィルスの感染拡大により、対面での参加者は関係者など8名に留まりましたが、60名を超える方々がオンラインで参加されました。礪波亜希氏（筑波大学）が討論者を務めた全体討論においても、ロシアの石油・ガス開発、先住民対応、環境政策、脱炭素政策などをめぐって、活発な議論がなされました。

脱炭素の問題については、昨年11月に田畑を中心として有志9名ほどで「脱炭素とロシア経済」という研究会を立ち上げました。今回の田畑の発表は、この研究会による最初の発表ですが、今後もArCS IIとも連動して研究会活動を行っていく予定です。[田畑]



会場とオンラインをつないだ全体討論の一コマ

◆ 2022年度外国人招へい教員（外国人研究員）の決定 ◆

2022年度の外国人招へい教員（外国人研究員）は、以下8名の方が決まりました（姓のアルファベット順）。前回までは、センターが国際公募により選考した外国人招へい教員候補が全学の委員会で審査されるという二段階の選考システムでしたが、今回からセンターの判断で採用を決定できるようになりました。これに伴い、従来の国際公募に加え、新たに「戦略的招へい」の κατηγοリーを設けて審査を行いました（以上の詳細についてはセンターニュース前号の関連記事をご覧ください）。北大での職名は特任教授または特任准教授となります。なお滞在期間については、新型コロナウイルス感染症拡大の影響による変更の可能性があります。[安達]

グリーンバーグ, マーク・レランド (Greenberg, Marc Leland)

本務機関・現職：カンザス大学・教養科学カレッジ教授（アメリカ）

研究テーマ：ボスニア語・クロアチア語・モンテネグロ語・セルビア語通時音韻論の理論的枠組みの新展開

滞在期間：2022年10月1日～11月30日

担当教員：野町

ジョーンズ, リャン・タッカー (Jones, Ryan Tucker)

本務機関・現職：オレゴン大学・歴史学部准教授（アメリカ）

研究テーマ：ポストソ連のサハリン：炭化水素アイランドの環境と経済

滞在期間：2022年7月1日～9月30日

担当教員：田畑

ズブコフ, キリル・ユリエヴィッチ (Zubkov, Kirill Yurievich)

本務機関・現職：ロシア国立研究大学高等経済学院准教授（ロシア）

研究テーマ：ロシア帝国における検閲制度と公共圏の発展

滞在期間：2022年5月1日～8月31日

担当教員：青島

デブラシオ, アリッサ・ジェイ (DeBlasio, Alyssa J.)

本務機関・現職：ディキンソン大学ロシア学科准教授・主任（アメリカ）

研究テーマ：現代ロシア哲学をマッピングする

滞在期間：2022年6月12日～8月11日

担当教員：安達

ホダルコフスキー, マイケル (Khodarkovsky, Michael)

本務機関・現職：ロヨラ大学シカゴ教授（アメリカ）

研究テーマ：草原の諸帝国：ロシア帝国とユーラシアのカウンターパートたち（1550年代～1900年）

滞在期間：2022年5月1日～7月1日

担当教員：宇山

ボヤノフスカ, エディタ・マグダレーナ (Bojanowska, Edyta Magdalena)

本務機関・現職：イェール大学教授（アメリカ）

研究テーマ：サハリン以後の時期におけるチェーホフとロシア帝国）

滞在期間：2022年5月13日～8月17日

担当教員：安達

マタソビッチ, ランコ (Matasović, Ranko)
本務機関・現職：ザグレブ大学文学部・教授 (クロアチア)
研究テーマ：スラブ諸語標準形態の類型論
滞在期間：2022年7月1日～8月31日
担当教員：野町

ムーン, デイビッド・ジェラルド (Moon, David Gerard)
本務機関・現職：ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン名誉教授 (イギリス)
研究テーマ：ユーラシア草原環境史
滞在期間：2022年11月6日～2023年1月6日
担当教員：諫早

◆ 2020・2021年度外国人招へい教員の来日中止 ◆

新型コロナウイルス感染症拡大の影響は続き、今年度に延期となっていた2020年度外国人招へい教員 (外国人研究員) 4名及び2021年度採用者5名の計9名のうち、実際に今年度センターに滞在できたのは、コロナ禍の合間を縫って来日したアブドゥラスロフ氏1名でした (9名の詳細についてはセンターニュース前号の関連記事をご覧ください)。8名の方は残念ながら来日中止となりましたが、センターでは今後も連絡を取りながら、国際的な研究協力を続けてゆきます。[安達]

◆ 専任研究員・助教・非常勤研究員セミナー ◆

ニュース前号以降、専任研究員セミナー等が以下のように開催されました。

専任研究員セミナー

11月24日：仙石学

報告：中東欧諸国における家族政策の変容：世界金融危機以後の状況から
コメンテータ：小森宏美 (早稲田大学)

このペーパーは、ロシア・東欧学会大会のジェンダーに関する共通論題のために書かれ、同学会誌に掲載予定のものです。世界金融危機以降に家族政策に関する制度を拡充したポーランド、エストニアと、これを削減したハンガリー、スロヴェニアを取り上げ、各国間で相違が生じたのには経済状況と政党政治のあり方の違いが影響していることを指摘しています。また、それぞれの家族政策によって生じた女性の就労状況の変化を、年齢層による違いにも注目しながら分析しています。コメンテータは、エストニアの状況を詳しく踏まえたうえで、そもそも家族政策とは何なのかという大きな問いを提起しました。凝縮した分析であるだけに、他の参加者からは、比較の議論の前提や、さまざまな物事の相関関係が分かりにくいという指摘が相次ぎ、これを受けて報告者から、製造業が維持された国では男性稼ぎ手モデルに基づき現金給付による家庭支援が重視され、製造業が衰えて金融中心になった国では女性が働くので、女性の就労支援が重視されたり、ケアを各世帯の責任に委ねたりすることが多くなるといった補足説明がなされました。[宇山]

11月30日：田畑伸一郎

報告：Japan-Russia trade and economic relations: Japanese perspective

コメンテータ：服部倫卓（ロシアNIS貿易会ロシアNIS経済研究所）

このペーパーは日ロ関係に関するハンドブックのために書かれたもので、日ロの経済関係は主に政治要因ではなく経済要因で動いているという、研究者の間では概ね共有されているが、一般には十分理解されていない命題を分かりやすく論証する内容でした。ロシアから日本への主な輸出品が石油・ガス、日本からロシアへの主な輸出品が自動車であるのはそれぞれの競争力に基づいていること、ロシアでの自動車購買力を含め、多くのことが油価に依存していることが、図表を使って示されました。コメンテータは、本稿の趣旨に基本的に賛意を示しつつ、政治が大きな流れを作ることもあるとの意見を述べ、また東日本大震災による原発停止に伴う化石燃料需要の増大、資源爆食型の中国によるロシアからの輸入増加、自動車市場の構造的変化などの複雑な要因や、日本とロシアの統計における貿易額の乖離も指摘し、今後の日ロ経済関係は脱炭素化の行方次第だろうとの展望を示しました。他の参加者からは、経済政策、政治文化、投資環境など、報告者の書いていない側面から政治が経済に影響する可能性を中心に、さまざまな意見が出され、刺激的な議論となりました。[宇山]

12月21日：長縄宣博

報告：Introduction: Russia's Empire and the Circulation of Democratic Ideals

コメンテータ：黒木英充（東京外国語大学／SRC）

このペーパーは*Dreams of Emancipation: A Transnational History of Revolutionary Russia* と題する論集の序章で、19世紀後半以降のロシア・ソ連の歴史と、民主主義的理想の世界的流通との関係を、ムスリム地域に重点を置きながら論じ、現在を「長い20世紀の終わり」として位置付けるものでした。コメンテータは、英語のレベルが高いこと、報告者の専門であるタタール人の位置づけが効いていることを評価したうえで、中東に関して修正・補足すべき点を丁寧に指摘しました。他の参加者からは、本稿が扱っている急進的な解放思想は民主主義と同一視できないのではないかと、長い20世紀とは結局何の時代なのかといった疑問と、知識人の国際的なつながりから国民国家建設が生まれるという論理や、ロシア帝国とソ連の崩壊や各種の革命の捉え方に関する質問、女性や宗教の問題が本稿の中でところどころ現れては消えているという指摘などが出されました。本稿が扱っている、広く深い問題群は、「センターの今後の生存戦略」研究の中でも繰り返し議論されることになりそうです。[宇山]

3月1日：宇山智彦

報告：カザフ自治政府アラシュ・オルダとシベリア出兵期日本の邂逅と齟齬：マルセコフ要請書と関連史料から見る背景

コメンテータ：野田仁（東京外国語大学）

今回提出されたのは、報告者のライフワークであるカザフ自治政府アラシュ・オルダについての研究の一環として、小野亮介氏（早稲田大学）がJACAR（アジア歴史資料センター）・外務省外交史料館で発見した新史料を読み解く共著論文でした。その日本語文書は、アラシュ・オルダがオムスクの科尔チャク政府と交渉していた時期に、ラユムジャン・マルセコフというセミパラチンスクの政治家がヴラジオストクで日本の外交官と接触を試みたことを示すものであり、新疆のグルジャとチュグチャクにいた日本軍人の存在が彼の視野に入っていた可能性もあります。ここからは、アラシュ・オルダがパリ講和会議に代表を送ることを模索するという

当時のカザフ知識人の世界情勢の分析だけでなく、シベリア出兵に伴う日本のユーラシア認識・戦略の限界が読み取れるとのことでした。

コメンテータからは、日本史への貢献をもっと明確にできるのではないか、日本の様々なアクター間の関係を再考しうるのではないか、オムスクにあった中華民国の領事館の文書など中国語文書を活用する余地があるなどの指摘がありました。出席者からは、アラシュ・オルダとポリシェヴィキとの関係、諸民族のナショナリズムに対する日本の認識・対応、アラシュ政府が各勢力との交渉の材料としていた軍事力の実態、内戦期のルーブルの価値など、多岐にわたる質問が出され、特定の史料の読み解きが、われわれの想像力を大いに刺激しました。また、史料紹介の作法や共著論文の書き方といった、技術的な面を意見交換できた点も有益でした。[長縄]

助教セミナー

1月25日：諫早庸一

報告：モンゴル帝国の興亡

コメンテータ：四日市康博（立教大学）

このペーパーは、報告者がみすず書房から刊行予定の著書『ユーラシア史のなかのモンゴル帝国』の終章に当たるものです。本全体が、グローバルヒストリーや環境史などの大きな議論枠組みを設定し、ペルシア語文化圏論、天文学、パンデミックなど多様な論点に目を配り、地域的にも広大な範囲を視野に入れた野心的な作品で、終章はそれらの内容を「移動」と「環境」というキーワードで総合させ、モンゴル帝国崩壊の原因論にも取り組むものでした。コメンテータからは、グランドセオリーを取り入れていることを評価しつつ、鵜呑みにし過ぎであるという批判がなされ、モンゴル帝国の中でもフレグ・ウルスを中心とした議論で、大元ウルスについては手薄であること、崩壊の時期・原因もウルスによって異なること、モンゴルの強さとして指摘されている点の多くは他の遊牧国家にも当てはまるので、複合国家としての多様性に注目した方がよいこと、「移動」と言っても季節移動と軍事移動は同列に論じられないこと、環境と政治史の関係を考えるには戦争などの二次的社会災害を視野に入れる必要があることなどが指摘されました。他の参加者からも、概念の使い方や議論のつなげ方の問題点、ジョチ・ウルスとロシアに関わる記述の薄さなどについての意見が出されましたが、このように多くの指摘がなされたのも報告者が極めてスケールの大きな議論をしているからであり、本の刊行が楽しみです。[宇山]

非常勤研究員セミナー

3月3日：宮崎千穂

報告：医学地誌を編む文明と科学のまなざし：一九世紀中葉における世界周遊とロシア海軍医学の科学化

コメンテータ：廣川和花（専修大学）

このペーパーは、地球規模での海域の移動を経験しながらローカルな医学地誌的情報を収集・蓄積し、それらをつなぎ合わせてグローバルな医学・衛生的視野を獲得した軍医たちによる、ロシア海軍医学の「科学化」の過程を論じたものです。医療日誌や医務報告書の書き方から、病院の環境決定論の問題、医学地誌と地理学、民族誌学、統計学などさまざまな学問分野の関わり、さらには統治・行政（「ボリス」）全般との関わりなど、ミクロな視点とマクロな視点を交差させながら議論が組み立てられています。コメンテータは、本稿の複雑な構成を

整理したうえで、ロシア海軍が作り出した「新しい病理学」とされているものは疫学に近似するのではないか、ロシア海軍医たちが「総合知」といった崇高な目的を付与した医学地誌編纂の実践的な目的が、長崎などでのロシア軍人による梅毒罹患の回避なのだとしたら矮小な話にならないか、などの疑問を提起しつつ、本研究のスケールの大きさを評価しました。他の参加者からは、海軍などの国家権力機関と学術の関わり（特に軍医の活動と軍事の関係）、ロシア人の「熱帯」認識、医学地誌学における陸への視点と海への視点の差異などについての質問・コメントが出され、知的に充実した議論ができました。[宇山]

◆ 研究会活動 ◆

ニュース第163号以降、センターが主催・共催した諸研究会活動（定例の国際シンポジウム等を除く）は以下の通りです。[編集部]

11月13日 田中利和（研究者）「牛のちからに牽かれて～地下足袋にまつわる協奏実践へ」
是恒さくら（美術家）「鯨の物語に惹かれて～探究から表現へ」（UBRJ・NIHU実社会共創セミナー「牛と鯨に導かれて境界をゆく：アフリカ・アラスカ・北海道をめぐる複眼的思考」）

11月15日 Елена Львовна Березович（Уральский федеральный университет），“Проблемы изучения языкового табу”（SRCセミナー）

11月29日 Derek Offord（University of Bristol），“The French Language in Russia: An Interdisciplinary History”（SRCセミナー）

12月2日 ロムアルド・フシチャ（ワルシャワ大学）「日本語を通して見たポーランド語の敬語」（SRCセミナー）

12月6日 Markus Giger（Charles University in Prague），“The (Non-)Grammaticalization of Possessive Resultatives in Czech”（SRCセミナー）

12月6日 Tomohiko Uyama（SRC）“A Northern Global South or a Global East? Post-Soviet Area Studies in the Age of Neoliberalism and Great Power Competition,” Zoran Milutinovic（SSEES）“Language and Literature in Area Studies: How to Understand Other Cultures through Literature”（SSEES&SRCセミナー “Rethinking Slavic Area Studies from the Opposite Edges of Eurasia”）

12月13日 山崎信一（東京大学）「「マケドニア人」はどう作られたのか？ 国名変更の背景としてのマケドニア国民形成過程」（北海道スラブ研究会）

12月14日 中地美枝（北星学園大学）「ソ連における統計と政治の関係：国家中央統計局長スタロフスキー（1905-1975）の役割から考える」（客員研究員セミナー）

12月15日 本田晃子（岡山大学）「社会主義住宅 最後の実験：ブレジネフ時代のユートピア」（客員研究員セミナー）

12月17日 安達大輔 (SRC) 「ヤーコフ・プロタザーノフ：帝政ロシアとソ連が愛したメロドラマ監督」(第39回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会)

12月22日 Алексей Алексеевич Гиппиус (Институт славяноведения РАН) “Язык древнего Новгорода по данным не книжной письменности: находки последних лет, состояние исследований” (SRC/ISSRAS共同研究会「スラブ言語学の潮流」)

1月6日 Brian D. Joseph (Ohio State University) “Loanwords in the Balkans: Their Typology and Their Value for Reconstructing Historical Sociolinguistics” (公益財団法人杉野目記念会／スラブ・ユーラシア研究センター共催研究会)

1月14日 吉田悦章 (京都大学 [前ウズベキスタン情報通信省大臣顧問]) 「コロナ期のウズベキスタンにおける財政政策の特徴と持続性:前政権時との比較やイスラームとの接点を交えて」(客員研究員セミナー)

1月18日 Наталья Громова (Государственный литературный музей, Россия) “Литературный процесс в Советской России в 20–30-х годах: по книге Натальи Громовой «Узел. Поэты. Дружбы и разрывы. История литературного быта 1920–1930 годов»” (公募研究共同研究班「スラブ・ユーラシア地域におけるメディア文化史の共同研究」セミナー)

1月24日 三村光弘 (環日本海経済研究所 [ERINA]) 「ロシア極東:対中国最前線を見る」(公募研究共同研究班セミナー)

1月28日 水野文月 (東邦大学) 「生物遺骸に残された"DNAの記録"を読み解く」澤藤りかい (総合研究大学院大学／日本学術振興会) 「古代の病原体DNA解析——その動向と評価について」(人文学のための古代DNAセミナー [SRC共催])

2月7日 高橋亮一 (日本学術振興会／國學院大学大学院博士後期課程) 「北方海域における漁業空間の編成：19世紀初頭～20世紀初頭」藤本健太郎 (日本学術振興会／東北大学) 「戦間期ソ連の対日外交と「サハリン問題」」須川忠輝 (大阪大学) 「日本統治下の南樺太における地方制度の展開」(公募研究共同研究班セミナー「樺太(サハリン)を事例にしたボーダースタディーズ：境界変動により何が起きるのか」)

2月14日 原田大輔 (石油天然ガス・金属鉱物資源機構 [JOGMEC]) 「ロシア北極域における石油・ガス開発の現状と見通し」徳永昌弘 (関西大学) ・アルバハン・マゴメドフ (ロシア人文大学) 「ロシア極北の資源開発と先住民問題：「ヤマルのパラドクス」の分析を中心に」田畑伸一郎 (北海道大学) 「脱炭素のロシア経済発展・北極域開発への影響」(ArCS II 社会文化課題セミナー「迫られる脱炭素と先住民社会への対応:ロシア北極域で進む石油・ガス開発」[SRC共催])

2月21日 平井一臣 (鹿児島大学) 「沖永良部出征者が見た朝鮮：大納宮継征露日記(前利潔氏発掘)を手がかりに」天野尚樹 (山形大学) 『『引きちぎられた』南の境界：日本と沖縄と奄美のあいだ』(公募研究プロジェクト型セミナー「国境の変動・変容と人びとの意識変容・行動変容：南方史と北方史の邂逅」)

2月22日 Nadine Meisner (舞踊ジャーナリスト、舞踊史研究) “The Writer Arthur Saint-Leon and the Condition of Dance in France” (公募研究共同研究班「スラブ・ユーラシア地域におけるメディア文化史の共同研究」セミナー)

2月26日 リレー: 竹富「波照間島 最南端の碑」 稚内「宗谷岬 サハリン」 対馬「対馬博物館 大陸との交流の歴史探訪」 五島「五島最西端 大瀬崎灯台」 与那国「西崎 最西端の碑」 礼文「北のカナリアパーク 利尻富士を望む」 小笠原「小笠原町役場 父島」 根室「納沙布岬 北方館」 標津「標津町役場 国後を望む」 (JIBSN実社会共創セミナー「JIBSN10周年・ネットワークリレー 境界地域をつなぐ」)

3月4日 服部倫卓(ロシアNIS貿易会) 田畑伸一郎(SRC)(SRC緊急セミナー「経済制裁とロシア: 緊迫するウクライナ情勢」)

3月6日 演劇: 伊藤愉(明治大学) 音楽: 梅津紀雄(工学院大学) 映画: 梶山祐治(筑波大学) 美術: 鴻野わか菜(早稲田大学) 文学: 奈倉有里(早稲田大学) 文化研究: 村田真一(上智大学) (SRC緊急セミナー「ウクライナ情勢: 文化面での反応」)

『戦争と平和』の翻訳について

望月哲男 (北海道大学名誉教授)

光文社古典新訳文庫のシリーズで担当していたトルストイ『戦争と平和』の翻訳が、2021年9月に出版完了となりました。2015年のICCEES幕張大会の頃に始まった話ですので、ずいぶん長いことトルストイの小説と付き合いがあったものだと思います。翻訳、しかも既訳のある小説の翻訳の話など、SRCセンターニュースの題材におよそふさわしくないとありますが、大恩ある宇山編集長のありがたいお誘いをお断りする勇気は持ち合わせませんので、以下ごく簡単に、今回の翻訳作業の感想など述べさせていただきます。

外国文学の研究者にとって、翻訳はむろん、興味深い作業です。そもそも文学作品の解釈行為自体が、作者と読者・解釈者の間のイメージ交換、すなわち個人レベルの「翻訳」ゲームで、お互いの頭の中の絵を近似させようという読者側の努力が前提ですが、それがいつも実るという保証はありません。時間や場所が隔たっている場合、母国語の文学の読解もかなり厄介で、それ故に面白い「翻訳」作業になります。外国文学の翻訳の場合は、時空間の距離ばかりでなく、言語・文化間の差もそこに介在しますし、なによりも解釈者(翻訳者)の頭の中に出来上がった絵を、彼の使用言語で細部まで再造形し、新しい読者に読解の対象として提供しなければなりません。脳内異文化間イメージ交換ゲームの公開版のような作業ですが、果たしてそこに描き出される図像は、もとの絵とどれほど似ているのでしょうか? 媒介要因やチェックポイントがあまりにも多すぎて、なかなか判断の難しいところで、すでに優れた翻訳が、しかも複数存在する作品に、時を経てまた新訳が要請されるという現象にも、それなりの理由があるでしょう。外国文学研究者の立場からすると、それは無駄のようでもあり、怖いようでもあり、また自分の読みの確認としてチャレンジしてみたくもあるような、複雑な気持ちのする作業です。

なにか当たり前のことを当たり前の言葉で説明（言い訳）しているような気もしますが、翻訳の一般的な機能とその現実的な可能性や限界について、古典新訳という作業の特殊な意味や性格について、さらに個々の翻訳者の言語感覚や時代感覚がそこで果たす役割やその評価について、論じればきりがありません。自分のした仕事についても、それが現代の日本の読者と過去のロシア作家の世界との距離を近づけることに幾らかでも役立てばと願いはするものの、結果は自分では判断できません。おそらくは読者によって答えも異なるはずで、仮に自分が読者となって、例えば小説の真ん中あたりにある青年ニコライ・ロスツフの狩猟の場面を読んでみても、そこに出てくる森や原っぱや古強者の母狼や近在の「おじさん」という変わった人物などが、はたしてトルストイの頭にあったものを再現できているのか、訳者が子供のころ見た風景や人物が混じりこんでいないか、判断に迷うところでは。

一人称代名詞単数にどんな訳語をあてるか、冗談や罵言や歌をどう訳すかといったたぐいの、無数の具体的な問題を含めて考えると、ますます翻訳という行為の難しさ、複雑さが痛感されます。完全な訳というものは、訳者の内側の話としても、実現しがたい理想のようです。ではなぜ、優れた既訳のある作品をわざわざ長い時間をかけて訳すのか—これも答えは色々でしょうが、私の場合は、結果だけでなくプロセスにも意味を感じています。つまり1日1ページとか2ページとかいった翻訳者のゆっくりしたペースで、作品テキストと逐語・逐文的に付き合う時間は、（僭越な表現ながら）作者になり代わった疑似創作体験とでもいうべき感覚（＝錯覚）を味わわせてくれます。他の形の読書からは得難いそんな体験が、しばしば結果として、作者の発想の傾向や、ひいては作品のテーマ構造のようなものを、目立たぬ細部にまで見出すことを助けてくれるような気がするのです。

したがって私の場合、翻訳の結果がどの程度きちんとしているかという問いの傍らに、翻訳という形でひとつの書物とじっくり付き合った経験を、作品解釈あるいは作家の理解にどんな風に活かせるかという問いがくっついています。

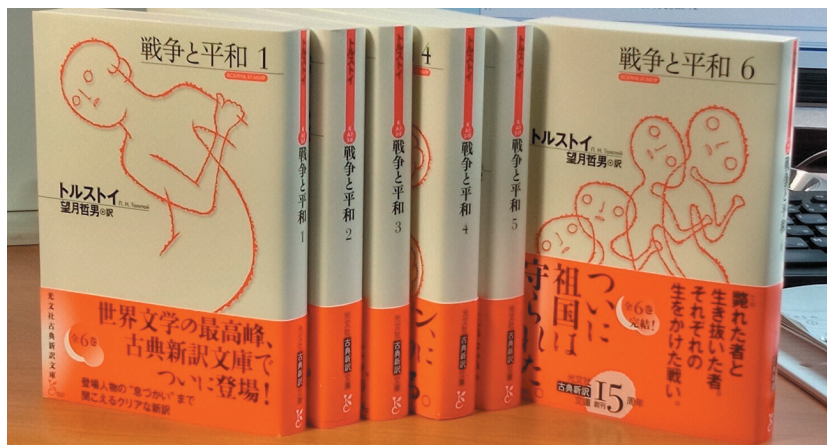
そんな意味で、『戦争と平和』について今関心を持っている事柄を簡単に箇条書きにすれば、以下のようになります。

1) 物語論としての小説：作品の主人公たちは一般に饒舌ですが、彼らの多くは信用できない語り手です。息子に良縁を望む父親も、他家の遺産相続に割り込もうとする未亡人も、戦闘報告をする将校も、見た夢を語る少女も、首都を守ろうとするモスクワ総司令官も、それぞれ自分の話の中に、意識・無意識を問わず大量の嘘や法螺を混ぜています。このことは、作品の後半からエピローグ2にかけて作者が展開する歴史批判（＝諸国民の運動という合成された力を、一握りの英雄とか文化の影響とかの部分力によって説明する近代史の虚偽への批判）に直結しています。アメリカの文芸学者ゲイリー・モーソンは、この小説が、物語（歴史）は必ず嘘になるという認識をベースに、「あらゆる物語の虚偽を明かす物語はいかにして書かれるべきか」という課題に捧げられた否定的叙述法（ネガティブ・ナレーション）による産物だと定義しています。卓見ですが、ただしそうした即断は、物語ること自体への作者の関心と意欲を過小視する結果にもなりかねません。虚偽であれ真実であれ、人間が物語（歴史）を必要としていること、世界が言葉でできていることへの感嘆とおおらかな承認が作品の根底にあることは、作者自身が縦横に展開している、比喩を始めとした華麗なレトリックの様態からもうかがえます。いわば物語（歴史）批判者としての作者の傍らには、物語（歴史）好きで卓越した物語能力を備えた彼の分身が、おちゃめなボディガードのように付き添っているわけで、既存の歴史への批判の背後には、で

は歴史記述はどうあるべきかという積極的な問いが、ぴったり張り付いています。歴史運動の法則解明のために国民の意志を積分するといったエピローグの疑似科学的な議論は、西欧近代史における英雄論の残存を揶揄するための壮大な法螺にしか聞こえませんが、それは別にして、物語の確かさへの疑念と物語ることへの意志とのぶつかり合いという側面から、この作品を性格づけてみたらと感じています。

2) ロシアの人間のテーマ：これはロシア文学の普遍的なテーマだともいえますが、1860年代のトルストイにもある意味で共有され、それが彼の作品と同時代のドストエフスキーやネクラソフなどの作品との接点の一つになっています。『戦争と平和』にも、シェングラベンで砲台を守り抜いたトゥーシン大尉とか、田舎で獵と歌に生きがいを見出すニコライのおじさんとか、貴族娘の身で民衆の踊りの所作を完璧に飲み込んでいるナターシャとかといった形で、数々のロシアの人間のモデルが登場します。その代表役が、将軍クトゥゾフと農民プラトン・カラターエフに割り振られ、忍耐と時間を費やして出来事の必然的な流れを理解し、個人の意志を超えたものに準ずるといった前者の態度や、個体としてではなく全体の一部として自分の生を意識するという後者のあり方が、アンドレイやピエールに強い印象を与えます。特にパリで教養を身につけたピエールが最終的に農民プラトンの世界観に共鳴していく経緯は、『白痴』のムイシキンの経験との類推でも興味深い点です。60年代のトルストイのロシアの人間に関するイメージ展開という観点から、この作品を見てみたらと思っています。

3) 作品の全体像：キャベツにとりついた青虫のように翻訳している過程で時折頭に浮かんだ問いは、こうしたいささか長い小説の全体像とは何か、それはいかにして把握できるのかというものです。翻訳の最終巻あとがきで紹介した序文の下書きでは、トルストイは作品に全体的な時間枠を設けはしたものの、それは拘束的なものではなく、各部分はそれ自体で完結しており、切り離して読まれてもかまわないという態度を見せています。これは、連載形式の小説を書く立場として、正直な態度かもしれません。実際の創作経緯をみても、作品は途中で規模も方向性も叙述の形式も変化しており、その意味でも「全体」の把握は単純ではなさそうです。前出のゲイリー・モーソンのように、全体のプランの不在こそがこの作品の特徴だとする論者もいます。ただし、先に触れた「物語」や「歴史」や「ロシアの人間」に関する通奏テーマを理解するためにも、読者としては何らかの形で『戦争と平和』を俯瞰する視点に立ってみたいという欲求に駆られます。キャベツと青虫では



そもそも問題になりませんが、青虫がいつか蝶になるとすれば、少なくとも相手の野菜としての形や大きさは俯瞰できそうです。具体的に考えれば、頭の中にドローンか何かを飛ばして高く上るイメージトレーニングが要るでしょうし、特殊な視力やクリアな記憶力も必要でしょう。「遅読」から「速読」へのギアシフトが要ることは言うまでもありません。老人には無理な課題かもしれませんが、特に誰にも迷惑のかからないことなので、いつか暇ができれば地味に試みてもいいかもしれません。

以上のような事柄について、そのうちぼちぼちと勉強したうえで、まとめることができればと思っています。

アフアナシイ・セリシチェフの手稿『南スラブ語群』をめぐる

野町素己（センター）

コロナ禍が予想以上に長引き、現地調査がメインの研究者たちは大打撃を受け続けている。筆者もそのような研究者の一人である。この数年間、ポーランドやカナダで予定されていた方言調査はすべてキャンセルで、この2年間予定していた研究ほぼ何も実現できていない。オンラインでの方言調査も試みたが、これもなかなか思い通りにはいかない。現地でもコロナウイルスが蔓延しており、これまで間に入ってくれていた現地協力者ともうまく折り合いがつかず、さらに高齢の情報提供者がコロナで亡くなってしまふことさえもあり、実に困難な状況が続いている。またコロナに感染していなくても日々気分は塞ぎがちになり、集中力も際立って落ちているようである。しかし、研究活動で禄を食む者としては、何もしないで寝転がっているわけにはいかない。そして毎年の業績が「専任研究員セミナー」でスタッフに晒され、成果が監視されるSRCにおいて、誰もそのような言い訳をしない。私はだいたいスランプに陥ったが、誰も気分が滅入ったりはしないのだろうか。誰か惨めなほどスカスカな業績表と、冷笑を誘うほどの雑文を叩きつけて「コロナのせいだ」と力強く言い訳してくれないか、そうすれば自分も堂々とそれに続けるのに、と日々思うものの、私の後ろ向きな願いは決して叶わない。それどころか、皆さんめげることなく順調に研究を進められ、どしどし重要な成果を出しておられるから、ただただ感服するのみである。となると、自分もこれまで集めてきた資料で何とか成果を出すか、それとも現地に行かなくてもどうにかなりそうな研究をするか、あるいはその折衷で研究を進めるかということになる。いずれにせよ、方法はある。

さて、現在獲得している科研費が折り返し地点に差し掛かったころの2019年、この研究期間が終わったら次に何をしようかと考えはじめた。これまでの研究はそれ自体進めながらも、次のプロジェクトに首尾よく移れるように下準備を始めるためである。2018年の春に、モスクワの文書館に保管されているサムイル・ベルンシュテインによる未刊行のマケドニア語文法について、マケドニア学士院からの招待で報告を行ったところ、研究者の間では一定の反応があった。しかし、同時に、古文書館の資料をさらに調べないとわからないこと、ベルンシュテインを知る人に聞いてみないとわからないこともたくさんあることも判明した¹。サムイル・ベルンシュテイン（1911–1997）とは、ソ連・ロシアで長年スラブ語研究の最重要人物であっ

1 これについて詳しくはセンターニュース第154号を参照されたい。

<https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jp/news/154/index.html>

ただけではなく、数々の国際プロジェクトを通じて東欧のスラブ言語学会を長年指導する立場にあった学者である。非常に重要な研究者であったので、昨年は生誕 110 年というやや中途半端な年であったにもかかわらず、モスクワでは記念シンポジウムが開かれた²。ベルンシュテインは主にブルガリア語の専門家、学生の時はアフアナシ・セリシチェフ (1886–1942) からスラブ語学の手ほどきを受け、師匠と同様に、マケドニア諸方言に大きな興味を持っていた。1938 年にソ連大百科事典にマケドニア諸方言の記事を書き、その言語的独立性についてソ連で初めて言及したことで有名である³。1940 年代に入ると、マケドニア標準語の立ち上げにも関係し、彼の案自体は採用されなかったものの、のちに上記の文法書を執筆する。しかし刊行直前の 1948 年、スターリンとチトフの対立が深まったため、文法書はお蔵入りとなった⁴。しかしベルンシュテインは 1945 年に成立したマケドニア標準語とその発展を、1997 年に他界するまで関心を持って観察し続けてきた。これはベルンシュテインの日記『記憶のジグザグ』にも詳しく書かれている⁵。またベルンシュテイン自身のマケドニア語観も言語状況や学術の発展により変化していった⁶。この文脈で興味を引くのが、師匠のセリシチェフのマケドニア研究である。それが初期のベルンシュテインに大きな影響を与えている可能性が高いからである。セリシチェフはスラブ言語学のあらゆる領域において、現在も参照される一流の研究成果を残した大学者であったが、その真髄がマケドニア方言研究であった。1918 年に『マケドニア方言研究』、1929 年に『ポログとブルガリア人：北西マケドニアの歴史学、民俗学、言語学的研究』、1931 年に『アルバニアにおけるスラブ人』といった重要な著作を次々と発表している。また、1935 年には『マケドニア方言学とセルビア人言語学者達』という著書において、マケドニア方言研究におけるセルビア人の非学術的で高圧的な姿勢を、学問的な見地から一刀両断にしている⁷。このうち、1918 年の著作以外はすべてブルガリアで刊行されている。というのは、当時のソ連の言語学では非科学的な「マール主義」が力を持っていたからである。結果として通時的なアプローチを含むスラブ語研究は隅に追いやられただけでなく、マール主義に反対する姿勢はイデオロギー的に反ソ連的というレッテルを張られ、そのために命を落とす危険すらあった。ロシア語史の専門家で優れた方言学者でもあったニコライ・ドゥルノボヤ、名著『スラブ祖語文法』(1916)の著者で、傑出した通時スラブ語学者のグリゴリイ・イリンスキイといった研究者が次々に銃殺刑に、既にロシア語研究の大家であったビクトル・ピノグラドフや上記のセリシチェフなど多くの学者が学界から追放され、ラーゲリで強制労働に処せられたことは、いわゆる「スラブ学者の事件」として広く知られている。この事件に関心を持たれた方は 1994 年に刊行されたフォードル・アシュニンとミハイル・アルパートフの『スラブ学者の事件：1930 年代』を一読されることをお奨めする。

2 このシンポジウムについては次のリンクを参照のこと。<https://inslav.ru/conference/12-14-oktyabrya-2021-g-mezhkulturnoe-i-mezhyazykovoe-vzaimodeystvie-v-prostranstve-slavii>

3 なお、この記事の原稿は、ベルンシュテインが事前にセリシチェフに見せて許可をしている。注 4 の拙論を参照のこと。

4 詳細は次のリンクに掲載されている拙論を参照されたい。

https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/books_new/2020/contents.html なお、ベルンシュテインはその後も刊行を試みた。とりわけフルシチョフがユーゴスラビアを訪問してソ連とユーゴスラビアの関係が改善した 1956 年から改訂に取り組んだが、関心が他に移ったこともあり刊行は断念したようである。

5 『記憶のジグザグ』は 1943 年から 1961 年の部分が 2002 年に刊行されている。ベルンシュテインの日記は 1983 年までつけられており、モスクワ市中央国立古文書館に保管されている。

6 *Balkanistica* 35 (2022) に掲載されている拙論を参照されたい。

<https://modernlanguages.olemiss.edu/balkanistica/>

7 もともとはソフィアのマケドニア研究所から刊行されていた雑誌『マケドニア・レビュー』の連載である。

ところで、このアシュニンとアルパートフの著作には、セリシチェフのアーカイブについて言及がある。彼らによると、セリシチェフのアーカイブは一部を除いて第二次世界大戦中に失われ、その中にあった『スラブ言語学』の第2巻『南スラブ諸語』、第3巻『東スラブ諸語』の原稿も行方不明になったとのことである⁸。ところが、1968年に刊行された『セリシチェフ選集』を見ると、セリシチェフのアーカイブは現在のロシア国立芸術文学文書館(RGALI)にあり、事実、文書館のデータベースを検索すると、第2巻『南スラブ諸語』の原稿(1941年頃)と出てくる。1942年、セリシチェフの死の間際に刊行された第1巻『西スラブ諸語』は、歴史言語学の立場で書かれた名著で、現在でも広く参照される優れたハンドブックである。第2巻『南スラブ諸語』の刊行はセリシチェフの死によって妨げられたが、その原稿が存在するのであれば、これは実に興味深い。セリシチェフは何よりも南スラブ諸語研究の大家であるが、原稿の執筆年が1941年頃ということから見て、これは1934年にコミンテルンが政治的にマケドニア語の存在を認め、そして1938年には弟子のベルンシュテインもマケドニア方言の独立性を言語学的に認めたのちに執筆されたものと考えられるからだ。この原稿について関係する研究者に聞いて回ったものの、研究自体はどうやら無いようである。ならば、一目原稿を見てみるのも悪くないのではないか。そう思ったのが2019年の秋のことである。原稿が保管されているロシア国立芸術文学文書館には行ったことがないので、周辺の研究者にいろいろ聞いて回ったところ、当時SRC非常勤研究員であった伊藤愉氏がしばしば調査するアーカイブだとわかった。私が別のアーカイブで調査した時に、そこの複数の職員が感じ悪かったので何だか不安になり、伊藤さんにダメもとで帯同を申し込んだところ、予想外にご快諾いただけた。伊藤さんから出発前からアーカイブでの手続きについての詳しい手ほどきを受け、現地でも一緒にアーカイブに出向き、そこでもいろいろな助言を賜った。アーカイブの職員は非常に親切で、とりあえず予算の許す範囲で必要な資料のスキャンを比較的短時間で得ることができた。そのメインはもちろん件の第2巻『南スラブ諸語』の原稿とされる手稿である。600枚以上もあるし、またセリシチェフの筆跡に慣れないと読めないのも、その場で読み取り書き写したりすることはできないと思い、ざっと全体を見て、関連しそうな手紙のスキャンなども依頼して、それらを持ち帰ることにした。

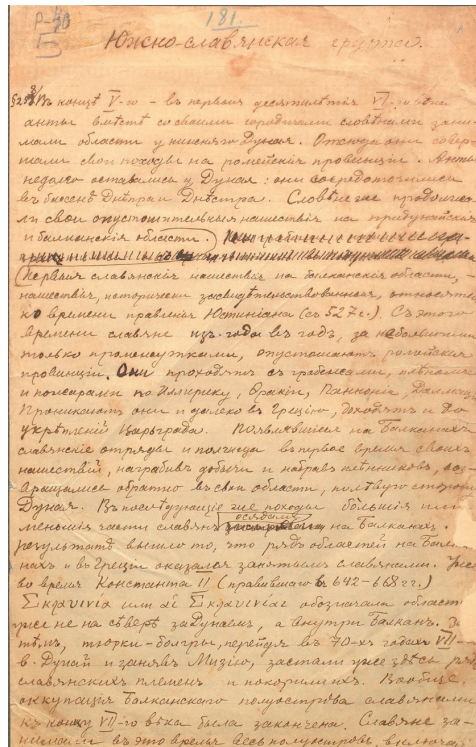
すぐにわかったのは、この原稿はただ不完全だけでなく、激しく欠損しているということである。最初の紙には181頁と書いてあり、§258から本文が始まる。最初の章のタイトルは『南スラブ語群』である。もし第2巻『南スラブ諸語』の原稿であるならば、章のタイトルとしては不自然であろう。次に気づくのはセリシチェフの正書法である。ロシア語正書法はロシア革命後に現在の簡略化されたものになったが、実際には、ソ連内外でもそれ以降しばらくの間は旧正書法が公に使われることもあった⁹。セリシチェフが書いたものを調べてみると、彼はどうやら1928～1929年頃まで古い正書法を用いていたようである。しかし、それ以後は一貫して新正書法を用いている。もしこの原稿が本当に1941年頃に書かれたのであれば、当然新正書法で書かれているはずであるが、実際には補足も含めてすべて旧正書法で書かれている。さらに彼が用いている参考文献も注目に値する。原稿の中で引用している最新の論文は1925年のアンドレ・マゾンのものである。最新の研究を追い続けるセリシチェフがそれ以降の研究出版物を参照しないことはありえない。そのうえ、原稿には「ポーランド語のセクションを参照」という注意書きもある。無論、ポーランド語のセクションが『南スラブ諸語』にあるわけがない。他にもいろいろなポイントはあるのだが、これらを総合的に勘案

8 同書の16頁を参照のこと。

9 無論、ソ連から亡命した白系ロシア人社会では旧正書法が長らく使われていた。

すると、この手稿はアーカイブの説明や、まことしやかな通説とは異なり、1925年頃に書かれた別の本の原稿であると結論付けられる。では、本当の第2巻『南スラブ諸語』の原稿は、アシュニンとアルパートフが言うように戦争中に紛失してしまったのか。恐らく違うだろう。というのも、1940年にセリシチェフはブルガリアの研究者ステファン・ムラデノフに、『西スラブ諸語』を脱稿し『南スラブ諸語』に取り掛かることを仄めかしているからである。すなわち完成した第2巻『南スラブ諸語』は最初から存在していないのである。では、ロシア国立芸術文学文書館に保管されている手稿は何なのか。ベルンシュテインによるセリシチェフの伝記『A.M.セリシチェフ：スラブ学者—バルカン学者』（1987）によると、セリシチェフは1920年代に『スラブ語研究入門』という教科書を執筆していたという。当時のソ連の言語学の状況において、モスクワでスラブ語研究の本を刊行することは不可能だったので、セリシチェフは原稿をブルガリア学士院に送り、そこから刊行する予定であった。ブルガリア学士院も一度は刊行する約束をした。ところが、待てど暮らせどゲラがブルガリアから送られてこない。セリシチェフは怒りの手紙を何度もブルガリア学士院関係者に送り、またブルガリアの知り合いに様子を探らせようとしている。刊行を待っている間に、セリシチェフは上に述べた2冊のマケドニアに関する大著をブルガリアで刊行している。ブルガリア学士院はセリシチェフに改稿を依頼したこともあるようだが、結局1932～33年頃にセリシチェフに原稿を送り返している。ブルガリアにとって、セリシチェフはあくまでも有能なマケドニア研究者としてのみ利用価値があったのであり、それ以外に便宜を図るつもりはなかったようである¹⁰。

6年以上待たされた上に、この仕打ちをうけたセリシチェフの落胆と怒りは激しく、1932年にブルガリア学士院から原稿を送り返すという連絡を受けた際には、上記のステファン・ムラデノフに「ブルガリア学士院は私の何年にもわたる労作を葬り去った」と糾弾する手紙を書いている。その後間もなくセリシチェフはラゲリに送られ、1938年まで学術活動に戻ることはできなかった。復帰してすぐに取り掛かったのが第1巻『西スラブ諸語』の執筆である。驚異的なスピードで1939年には脱稿している。このころにはソ連でマール主義が弱まり始めていたが、それでも刊行まで2年かかった。刊行が可能になったのはソ連学士院会員でもあり、マール主義を生き抜いた権威的なスラブ語学者の長老ボリス・リャプノフ(1862-1943)の甚大な支援があったからである。いずれにせよ、復帰後の初めての著作の元になったのが、1925年に完成していて、ブルガリアに送ったあの『スラブ語研究入門』である。この原稿の西スラブ諸語の章を当時最新の文献を用いて大幅に改定し、独立した著作に仕上げたのである。そして、すぐに『南スラブ諸語』の執筆 /



セリシチェフ著『南スラブ語群』の最初のページ
(ロシア国立芸術文学文書館蔵)

¹⁰ ベルンシュテインの日記『記憶のジグザグ』（未刊行部分）によると、セリシチェフ自身もそのことはうすうす気づいていたようである。



ダニロフスコエ墓地のセリシチェフの墓前にて
(2019年12月30日)

改稿に取り掛かるはずであったが、それに着手することなくセリシチェフは1942年12月6日にこの世を去った¹¹。すなわち、私が手に入れた手稿のスキャンは1925年に完成した原稿の一部であり、将来の第2巻『南スラブ諸語』の基礎となるものではあったが、その第2巻の原稿そのものではなかったのである。

さて、この原稿において、最も気になるのがマケドニア諸方言の扱いです。よしんば1925年から何も手が付けられていないとしても、原稿にはマケドニア方言研究の第一人者として、何か興味深い記述や見解は見られるのだろうか。ところがなんと、マケドニア諸方言が扱われているはずであるブルガリア語の章において、マケドニア諸方言の部分が完全に失われているのである。セクション番号がとんでいるので、そこに何かあったのは間違いないだろうが、原稿には西マケドニア方言の分類についてごく僅かしか書かれておらず、

主要な部分は欠損していたのである。セルビア・クロアチア語、スロベニア語の章はほぼ完全だっただけに、大変残念である。その一方で、セルビア人研究者とブルガリア人研究者の間で長年論争になっている、いわゆるトルラク方言の属性については、ブルガリア語とセルビア・クロアチア語の両方のセクションで、それぞれの言語の方言として扱われていることがわかった。これは記述としてかなり斬新ではあるが、客観性と学術性を何よりも重んじるセリシチェフの強気な態度の現れでもあり、決してセルビア人、ブルガリア人に阿ったわけではないのである。このあたりも、当時ブルガリア学士院がセリシチェフの原稿を刊行しなかった理由の一つになったのであろうか。

結論として、1940年代に書かれたとされる幻の第2巻『南スラブ諸語』は存在せず、また1925年のものと判明した原稿には期待していたマケドニア諸方言の記述は欠損していた。この手稿の背景の分析には他のアーカイブ資料も多く用いたが、調べれば調べるほど自分の期待から遠ざかっていく、これがこの原稿の分析をめぐる感想で、真実はときにずいぶん忌々しいものであるとも感じた。もしベルンシュテインが今も生きていて、私がアーカイブで手に入れた原稿を見たら、私がああでもない、こうでもないと考えながら調べたことはほぼ無意味で、「これはブルガリアで刊行できなかったセリシチェフの1925年の原稿の一部だ」と即座に断言できた話であろう。

2021年12月8日、モスクワのスラブ学研究所で「セリシチェフの学術的遺産と周辺のスラブ方言の研究」という国際シンポジウムが開催されたが、まことに不幸なことに、私はそれに招待されてしまった。別のテーマでもよかったが、せつかく時間をかけて調べたのだし、実際に原稿を精査したのは恐らく自分だけであると言いつけ、上記の原稿をめぐる「探偵物語」

11 実際には第2巻『南スラブ諸語』の第1部として、セリシチェフは『古代スラブ語』を執筆していた。このことは上記のリュプノフとベルンシュテインの1940年代の文通から読み取れる。セリシチェフの『古代スラブ語』は『南スラブ諸語』とは全く別個の著作として1951～52年に刊行された。なお、『古代スラブ語』とは『古代教会スラブ語』のことである。この時期まで刊行が遅れたのは、原稿が完成していなかっただけでなく、古代教会スラブ語が宗教と関連づけられがちだったことによる。

をできる限り詳細に話した。報告直後にはあまり反応がなかったが、あとで数名の研究者からメールで問い合わせがあり、いつ論文にするのかというようなことを聞かれたので、興味を持った研究者も少しはいたようである。結果は華々しい発見や驚きの新解釈ではなかったが、それでもスラブ語研究史への貢献が僅かでもできたのであれば何よりであるし、コロナ禍ゆえに、あきらめて昼寝をして過ごすよりは、幾分マシだったと思いたい。伊藤さんに協力していただいて集めてきた資料はまだいくつかある。また、あまりにも人を罵倒するので、時に引用しにくいベルンシュテインの未刊行回想録もある。コロナ禍が続く間は、それらと改めて向かい合い、何か次の研究プロジェクトに結び付けられたらと願う。

三谷恵子先生のご逝去を悼む

野町素己（センター）

日本を代表するスラブ言語学者で、ロシア・中東欧関係の研究コミュニティを長らく牽引してこられた三谷恵子先生が、2022年1月17日に他界された。64歳の若さであった。来年の東京大学退職を目前にし、これからますますご活躍が期待される年齢だけに、大変悔やまれることである。

三谷先生は東京大学文学部のご出身で、在学中は特に栗原成郎先生の薫陶を受け、スラブ語学を広く学ばれ、同時に日本のスラブ語学の伝統的な文献学的手法に基づく研究にも取り組まれた。また三谷先生がこの系譜の正当な継承者であることは、恩師の栗原先生同様、スラブ諸語による文学作品にも深い関心を持ち、ミロラド・パビッチやメシヤ・セリモビッチといった南スラブの古典文学を積極的に翻訳・紹介されたことにも示されている。その一方で、三谷先生のスラブ語研究のスタイルは、かつての日本でしばしば見られた、日本にいながらロシアや欧米における研究成果を盲目的に追従するタイプとは一線を画すものであった。1986～1988年に崩壊前夜の旧ユーゴスラビアのクロアチアに留学され、ザグレブ大学哲学部では、この極めて短期間に『クロアチア語あるいはセルビア語における動詞アスペクト』という、スラブ語研究の王道であるゆえ、新機軸を打ち出すのがなかなか難しいテーマで博士号を取得された。普通の人にとって2年間は実践的な語学学習ですら短期間であるから、これはまさに驚嘆に値する。

1990年にご出身校である東京大学文学部の助手に採用され、1993年には筑波大学の専任講師に着任された。驚くべきことに、その間の1992年には『ロシア語における名詞句の構造と機能の研究—発話の中の名詞句の定・不定・照応』という題目で東京大学からも博士号を取得しておられる。この後も、三谷先生は海外でも日本でも数多くの調査や研究発表をこなされるが、いずれも従来の枠にとらわれずに、個別言語研究の成果を踏まえながらも、一般言語学やその他の隣接分野の最新研究成果を柔軟に取り入れた独自の研究成果を出され、常に一目置かれる存在の研究者となるが、その原型はキャリア初期に出来上がっていたようである。なお、生涯を通じて文献学的研究に取り組まれていたが、最晩年はその領域に特化され、なかでも南スラブ諸語のアポクリフオン校訂の諸問題にたずさわっておられた。

三谷先生は1997年に筑波大学助教授に昇任され、1999年から山口巖先生の後任の助教授として京都大学に移られ、2005年に教授になられた。その後2013年には再び母校の東京大

学教授として着任され、亡くなるまで研究教育活動に従事された。

生涯を通じて、小さな専門や決まった分析理論の枠にとどまることなく、貪欲に専門分野を広げられ、本邦におけるスラブ語学研究的の第一人者として指導的な立場にあられた。年を重ねると、しばしばこれまでの研究の焼き直しや繰り返しが目立ち、さらには研究活動を控えめにする研究者がいる中で、三谷先生はますます積極的に新しい成果を世に出し続けていた。研究者としての模範であるように思う。三谷先生は社会貢献や後進の育成にも余念がなかった。1997年には『クロアチア語ハンドブック』（大学書林）、2011年には『スラヴ語入門』（三省堂）という、もはや当該領域の古典となった学術的な教科書も執筆され、2003年には実用的のみならず学術的にも大変優れている大著の『ソルブ語辞典』（大学書林）も刊行された。大学教育だけではなく、著作活動を通じることで、後進に肯定的な影響を与え続けられた。キャリア後期には日本ロシア文学会会長(2017～2021年)、日本スラヴ学研究会企画編集委員長(2019～2021年)、ロシア・東欧学会理事(2015～2018年)などを歴任され、ご専門のスラヴ語研究はもとより、ロシア・東欧人文学研究発展に重要な役割を果たされた。

三谷先生はスラブ・ユーラシア研究センターとの関りも深く、1990年代の若手時代には研究誌『スラヴ研究』に画期的な論文を幾本も投稿され、その後は査読者として、また編集協力者として最晩年まで継続的にご協力くださった。加えて2006～2008年は客員助教授として、さらに2003～2007年の「21世紀COEプログラム」、2008～2012年の「新学術領域『ユーラシア地域大国の比較研究』」といった大プロジェクトにおいても、センターの共同利用・共同研究拠点事業、また拠点運営委員や共同研究員としてもご尽力され、従来スラブ・ユーラシア研究センターがカバーしてこなかった言語研究から多くの成果を出され、スラブ・ユーラシア研究センターの多角的な展開に大きく貢献してくださった。



2013年にSRCで行われた国際シンポジウムにて（前列左から2番目が三谷先生）

三谷先生は文字通り全人生をスラブ言語文化研究に捧げられた。尽きることのないこれからの学術的挑戦を多く目標に掲げながらも、現在も収束が見えないコロナ禍のなかで闘病生活を強いられ、全く思い通りに研究が進められないことはさぞ無念であったろうと思われる。その一方で、誰もが羨む天賦の才能に加え、たゆまぬ努力による超人的な生産性を兼ね備えた三谷先生は、その比較的短い生涯を、これまでの日本のスラヴ語研究者が決して達成しえない多くの

学術的難題をやすやすと解決しながら、一気に駆け抜けられた。スラブ語研究者の多くは憧憬の念を抱きながら、三谷先生のご活躍を目の当たりにし続けていた。

まだ先生がお元気なころ、ある研究会の後の食事会で、タイムマシンがあれば一番会ってみたいスラブ語学者は誰か、といった他愛もない話を三谷先生としたことがある。三谷先生は、満面の笑みを浮かべて、スラブ文献学の碩学バトロスラブ・ヤギッチの名前を挙げ、その魅力を熱心に語られた。普段寡黙な先生だけにその様子がとても印象的であった。ご病気から解放された今、天国で念願のヤギッチとの面会は果たせたであろうか。三谷先生のことなので、きっとこれも実現されるだろう。

大変お世話になったスラブ・ユーラシア研究センターの一員として、また同じくスラブ語研究を志した同窓の後進として、これまで受けた三谷先生からの数限りない有意義なご指導に深く感謝しつつ、三谷先生が安らかにお休みになることを心より願う。

(2022年1月25日)

哀惜 岡奈津子さん

宇山智彦（センター）

2022年1月27日、日本貿易振興機構アジア経済研究所新領域研究センターガバナンス研究グループ長で、スラブ・ユーラシア研究センター共同研究員の岡奈津子さんが急逝した。岡さんの業績は『日本中央アジア学会報』に掲載する予定だが、ここでは、学生時代からの友人として個人的な思い出を書きたい。

岡さんと最初に会ったのは、1988年の晩春か初夏の頃、東京大学教養学部教養学科ロシア科への進学希望者に対して、私たち3年生が開いた説明会の時だった。進学希望者の2年生たちは皆とてもやる気がある印象で、私は心が弾んだのを覚えているが、中でも岡さんは目の輝きの強さが印象的だった。秋に2年生が内定生としてロシア科の授業や学生室に出入りするようになると、岡さんは第一印象に違わず、優秀かつ話のおもしろい人であることが分かった。

当時のロシア科はいわば黄金時代であり、のちに研究者（ロシア関係には限らない）になった人が多いが、それ以外の人も含め多士済々だった。学生同士の関係も濃密で、学生室でも渋谷の居酒屋でも、ペレストロイカのことから身近な人間関係のことまで、にぎやかに長時間議論していた。岡さんは当時、日韓学生会議で忙しくしていたので、私たちほどそういう集まりの常連ではなかったが、参加する時はいつも、場の中心の一人になっていた。私は勝手に、やんちゃだが出来のいい妹のようなイメージを持っていて、普通は人をちゃん付けで呼ぶようなことはしないのに、岡さんには思わずなっちゃんと呼びかけてしまう時があった。

折しも日本とソ連の政府間合意により、日本人学生のためのソ連政府奨学金留学制度が始まり、私は第1期生として1989年から、岡さんは入れ替わりで第2期生として翌年から、それぞれ1年弱モスクワに留学した。岡さんは学生同人誌に、韓国人留学生と一緒にモスクワの韓国人教会を訪れた時のことなどを書き送ってくれた。韓国国交樹立を含め、数々の新しい出来事がソ連に起きていた時代だった。

岡さんは大学院修士課程までは（旧）ソ連の朝鮮人を研究していたが、1994年にアジア経済研究所（アジア研）の研究員になってから、本格的にカザフスタンを研究し始めた。ちょうど

この年、私は在カザフスタン日本大使館の専門調査員を務めていて、9月に中央アジアを訪れたアジ研の調査団のお世話をした。というよりも、それを口実にして、カザフスタンの政府関係者や研究者のところに一緒に行ったり、クルグズスタンでの国際学会に参加したりしたのだった。近いテーマを研究するようになった友人と一緒に調査をし、議論ができるのは至福の時間だった。



1994年9月、カザフスタン大統領府にて。
この建物は遷都後にアルマトゥ市庁舎となり、2022年1月の事件の際に放火・略奪されてしまった

この頃から数年間、普段の居場所は違っても、岡さんと私が一番緊密に連携していた時期だった。1999～2001年には岡さんがアジ研の海外派遣員としてカザフスタンに滞在している間に、私もカザフスタンを訪れる機会があった。それまでは私が岡さんに研究機関・研究者や政治家を紹介していたが、この時には岡さんがもう幅広い人脈を持っていて、有名なジャーナリストや反政府活動家と会う貴重な機会を作ってくれた。

研究上の情報・意見交換を頻繁にしていたのはもちろん、個人的にもいろいろな話を聴いたり聴いてもらったりした。岡さんは正義感が強く、率直な物言いや思い切った行動をする人で、ある意味では奔放・豪放磊落なイメージを持たれていたと思うが、とても繊細な面があり、他人への細やかな気遣いをしていた。自分については謙虚すぎるほど謙虚で、悩む時は深く悩む人だった。私とは性格も人生観も違うが、不思議なほど信頼し合える仲間だった。私が若気の至りで、自分は生き急いでいるなどと口走った時には静かに微笑んでくれて、正気に返ることができた。岡さんの方が早く逝って、私が追悼文を書くことになるとは、思いもよらなかった。

2000年代に入って私は、カザフスタンの現代政治や民族問題は基本的に岡さんに任せようと考え、カザフスタンでは主に歴史研究をし、政治や紛争に関する調査は他の中央アジア諸国でするようになったので、岡さんと一緒に現地調査をすることはなくなった。それでも、私が編集する本で岡さんに分担執筆してもらったり、アジ研での岡さんの企画に私が参加したりする機会は多く、スラ研の国際シンポジウムなどでも岡さんにたびたび登壇してもらった。2015年にアジ研と同じ幕張で開かれたICCEES（国際中欧・東欧研究協議会）幕張世界大会では、岡さんは裏方で大活躍をし、私の関係の外国人参加者の急な予定変更にも、的確に対応してくれた。こうした催しや、共通の知人のカザフスタンからの来日などのたびに、岡さんと私は旧交を温めた。ただ、10年ほど前からは、個人的なことを話す機会はやや少なくなっていた。これは主に、私がもう昔の仲間に頼りすぎではいけないと思うようになったからだが、今思えばそれは私の勝手だった。



1997年センター夏期国際シンポジウム後、
中央アジアからのゲストと共に

さまざまな種類の仕事の依頼を断れなくて收拾がつかなくなる私とは違い、岡さんは仕事を選び、自分で立てた目標を一つ一つ達成していく人だった。イギリスで博士号を取り、日本とカザフスタンで著書を出し、論文も着々と発表した。とはいえハプニングに見舞われることも多かった。特に研究の中心的テーマをカザフスタンにおける腐敗の問題に変えてからは調査で苦勞することが多かったようだ。2011年のカザフスタンでの在外研究は、このテーマでの本格的な調査の開始という意味でも、家族同伴の滞在だったという意味でも（息子さんが保育園で覚えたカザフスタン国歌を歌うビデオは、ネット上で大いに話題になった）、チャレンジングかつ充実したものになるはずだったが、手続的な手違いにより、予定よりも早く切り上げざるを得なかった。しかし岡さんはその後も粘り強く調査を続け（このような研究をする人に対しても入国禁止や調査禁止をしないのは、権威主義体制とはいえカザフスタンの度量の広いところである）、2019年に『〈賄賂〉のある暮らし：市場経済化後のカザフスタン』という本を出版した。翌年、この本は榎山純三賞を受賞している。

腐敗の研究は、世界の中央アジア研究で流行のテーマと言ってもよいが、日常的な腐敗の問題をこの本ほど生活に密着した形で明らかにし、しかも腐敗の原因と業務分野別の違いを明快に分析した研究は他になく、岡さんのコミュニケーション能力と分析力が十二分に発揮された本だった。ただ、私にはこの本に対して戸惑いもあった。私は、地域研究者は研究対象国における否定的現象についても臆すことなく書くべきだというスタンスを岡さんと共有しているが、予備知識がない人がこの本を読むと、カザフスタンについて過度に悪いイメージを持ってしまうのではないかと心配した。カザフスタンの腐敗の程度は、旧ソ連諸国、特に中央アジア諸国の中ではまだまだましな方だからである。そのため、書評会の企画などを手控えてしまったのだが、今思えば、そんなことをむやみに心配せずに、この本のすばらしさを多くの人に、そして岡さん本人に伝えるべきだった。

2020年にコロナ禍が始まってからは、岡さんと直接会う機会はなくなってしまった。それでも、日本中央アジア学会の編集委員会や、同学会とアジ研の共同企画、スラ研の2021年度夏期シンポなどで一緒に仕事をしていたから、今年に入る頃には、遠からずまた会えるだろうという気分だった。1月初めにカザフスタンで起きた抗議集会と暴力的衝突は、私が計2年半を過ごし、岡さんともたびたび歩いたアルマトウを中心としたものだったので、私にとって非常に衝撃的な事件だった。しかし何とかショックから立ち直り、事件と今後の見通しを分析する座談会などを一緒に企画するために岡さんに声をかけようかと思っていた矢先、彼女は世を去って

しまった。

その日から私はずっと、岡さんにあのことも話したかった、このことも聞きたかった、彼女のためにもっとできることがあったのではないかと、後悔の念に苛まれてきた。世界で悪意や偏見が横行し、研究者を含む多くの人が保身のために沈黙しがちな今ほど、岡さんの気遣いある正義感が必要とされている時はないのに、なぜ彼女を喪わなければならなかったのか、不条理を嘆いた。私がロシア語でフェイスブックに書いた訃報には、世界中から150人近い人がコメントを寄せ、岡さんが実に多くの人に愛され、親しまれ、業績を評価されていたかが改めて確認できたものの、喪失感と胸の痛みはおさまることがなかった。東京で家族葬が行われているはずの時にも、心の中で別れの言葉を言うことはできず、帰ってきて、と思うばかりだった。しかし今、気力を振り絞って言いたい。人生を全力で駆け抜けたなっちゃん、どうか安らかに。

学界短信

「人文学のための古代DNAセミナー」報告記

諫早庸一（センター）

本稿は、2022年1月28日（金）に行われた「人文学のための古代DNAセミナー」の報告記事である。当日は110名もの方々に御参加いただき、セミナーは盛況のうちに幕を閉じた。御参加の全ての皆さまにこの場を借りて感謝申し上げるとともに、今後のために当日の様子を参加記としてまとめておきたい。プログラムは以下の通りであった。

司会：廣川和花（専修大学）

16:00～16:10：宮崎千穂（北海道大学）「趣旨説明」

16:10～17:10：水野文月（東邦大学）「生物遺骸に残された“DNAの記録”を読み解く」

17:10～18:10：澤藤りかい（総合研究大学院大学/日本学術振興会）「古代の病原体DNA解析—その動向と評価について」

18:20～19:00：総合討論

【主催】科学研究費基盤研究B「近代ユーラシア高緯度帯の風土病とそのパンデミック化：帝国医療研究の拡張を目指して」（宮崎千穂：21H00500）；科学研究費新学術領域研究（研究領域提案型）「出ユーラシアの統合的人類史学：文明創出メカニズムの解明」（松本直子：JP19H05731）

【共催】北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター；岡山大学文明動態学研究所；科学研究費基盤研究B「「14世紀の危機」についての文理協働研究」（諫早庸一：21H00555）

冒頭の趣旨説明においては、まず本セミナーの主催研究プロジェクトの代表者である宮崎千穂氏が、近年自然人類学や古病理学の分野では古代DNA解析の手法によるヒトの遺伝的關係に加えて感染症の起源や伝播の経路などについての研究がめざましい発展を遂げていることに触れたうえで、歴史学・考古学など他分野の研究者がこうした研究成果をどのように理解すればよいのか、文理協働をどのようにすすめてゆけばよいのか、こうした問題意識から本セミナー

の開催に至ったことを説明した。その後、宮崎氏は今回のセミナーの主催・共催となっている研究プロジェクトの概要を説明し、自らの研究分野である梅毒に言及する。梅毒の起源や伝播の経路については、例えばコロンブス説・旧大陸起源説など説が分かれる現状である。そしてこの分野の研究は現在、DNA解析が深化の一端を担っており、それに知悉することが文献を扱う歴史学者にとっても必要な現状であると述べられた。まさにこのセミナーは、古代DNA・古代の病原体DNA研究の先端にいる研究者御二人の講演によって、他分野の研究者たちが知っておくべき基礎的知識や研究手法、論文読解のポイント等々を学ぶための場であり、ありうべき連携を模索する機会なのである。

その後、セミナーは講演へと入っていく。2本の講演の1つ目は、分子生物学・古代ゲノム学を専門とする水野文月氏による「生物遺骸に残された“DNAの記録”を読み解く」であった。水野氏はまず古代DNA研究の基礎となる用語の解説から講演を始めた。「DNA」がデオキシリボ核酸という物質であること、「ゲノム」とはある生物を生物たらしめる遺伝情報の総体を意味するものであること、そして「遺伝子」とは遺伝情報の最小単位であることが説明された。ヒトのDNAは細胞に存在しており、核には父母双方から受け継ぐ常染色体や性染色体が、ミトコンドリアには母方のみから受け継ぐDNAが格納されている。現在のDNA分析は次世代シーケンサ（Next Generation Sequencer：以下NGS）の導入により取得できるデータ量が飛躍的に増えたものの、特に古人骨などの生物遺骸から抽出した古代DNAに関しては、残存量の少なさと断片化からその抽出が難しく、その分析は極めて保存状態の良いものに限られていた。温度・湿度・pH等の環境条件によってDNAの保存状態は異なり、一般的には寒冷な地域の生物遺骸が古代DNAの良好なターゲットとなる。一方で日本列島は古代DNA抽出にとってはあまり良い条件とは言えない。水野氏らの研究グループは、目的外のDNAを除き、対象DNAを濃縮するターゲット・エンリッチメントを行うことで、こうした条件を克服していることが紹介された。そうすることで、ヒトDNAを0.0006パーセントしか含まない人骨試料からでも目的のゲノム情報を効率的に獲得することができるのである。

その後、水野氏はこうした基礎に基づき、古代DNAの研究例をいくつか紹介していく。まずはイングランド王リチャード3世（1452～85年）の古人骨研究である。2012年にレスター市内で発掘された古人骨の（母系の遺伝指標である）ミトコンドリアDNAの分析により、その母系関係を下ったところ、19世代に関しては塩基配列が完全に一致、別家系でも21世代に関してわずかに1塩基の違いを数えるのみであった。このような塩基の違いを意味する一塩基多型（＝スニップ／SNP: single nucleotide polymorphism）や反復配列の反復回数の違いを意味するSTRP（short tandem repeat polymorphism）といった用語の説明もなされた。次の事例は江戸時代初期に生きたウィリアム・アダマス／三浦按針（1564～1620年）に関わる古人骨研究である。伝三浦按針墓地出土の古人骨は西洋人である可能性を示す伸展葬の形を取っていた。骨成分の1つであるコラーゲンに含まれる放射性炭素（ ^{14}C ）の値は 410 ± 30 であり、その人骨の年代は三浦按針が死亡した1620年と矛盾のない結果であったという。次に人骨を用いた食性分析がなされ、コラーゲンに含まれる炭素・窒素同位体の割合から、生前に食べていた食物が推定された。その結果は、当時の江戸時代の日本人の食生活と差のないものであり、長期間にわたり死亡するまで日本に居住していたと考えられる。最後に水野氏自身による古人骨DNA（サンプルは側頭骨錐体部）のNGSによるデータ解析—ミトコンドリアDNA全長の96.4%を決定—は、そのハプログループがH1e2bに推定されることを明らかにした。Hは現代日本人ではまず観察されないハプログループであり、逆にヨーロッパ系においては高い頻度で観測される。このことから出土人骨はヨーロッパを出自とする人物である可能性が高いことが判明し

たのである。さらにH1eまで見ていくと、それは現在のイベリア半島に多く分布する系統であった。このように複合分野にわたる古人骨解析から、出土人骨の諸相が明らかにされたのである。3番目の研究は港川1号人骨のミトコンドリア・ゲノム解析である。すでに述べられたように日本列島は古人骨DNA分析にとっては厳しい環境であり、また旧石器時代の遺跡から人骨が出土した例は極めて限られている。その1つである沖縄南部港川フィッシャー遺跡出土の古人骨が分析の対象となった。分析の結果、港川1号のハプログループはMであるということが明らかになった。日本の他地域出土の古人骨との相関を考えると、港川1号はどのグループにも含まれない位置にあった。この事実、港川1号のミトコンドリア・ゲノム配列には縄文・弥生・現生日本人のいずれにも直系でつながるものがないことを示している。その一方で、この配列がハプログループMの祖型を有するという事実を捉えれば、旧石器時代人から現代日本人までには母系の遺伝的多様性には連続性があるとも言えるのである。

2本目の講演は、自然人類学や古代DNAを専門とする澤藤りかい氏の「古代の病原体DNA解析—その動向と評価について」である。澤藤氏はセミナーの冒頭で、この講演の目的が病原体の歴史に関する古代DNAの論文について、その妥当性を評価するための判断材料を提示するものであることを明示した。澤藤氏が主として扱っているのは、古代歯石のDNA研究であり、その解析から江戸時代の食生活などの再現を実践している。「古代DNA」という用語については、100年前より古いDNAは「古代DNA」として扱われることが多いとのことであった。古代DNA分析は2010年代からのNGSの導入により一気に加速していく。澤藤氏は前提として、なぜ古代DNA解析が必要とされているのか、現代DNAだけでは駄目なのかという問いを提起する。回答としては、現代DNAだけでは、過去の移動・拡散の諸相を明らかにすることはできないということが示された。その複雑性は特に病原体の場合に顕著なのである。例えば結核菌の研究に関して、その拡散の推定年代は現代DNA分析（約7万年前）と古代DNA分析（6000年前以降）とで大きな齟齬を見せており、このことは現代DNA分析を歴史研究に適用することの限界を示す好例となっている。そこから澤藤氏は進んで、このような齟齬がなぜ生じるのかを説明する。それは系統樹の作成や分岐年代の推定に関わる問題である。系統樹においては系統の似ているものが近く、その逆が遠くに配置され、DNA配列の系統樹作成には主としてSNPが用いられる。分岐年代に関しては分子時計という概念が用いられることも説明された。突然変異による塩基置換は一定の割合で蓄積するため、この塩基置換数から時間を推定できるのである。これに化石記録や古代DNA試料の年代で補正をかけていくことになる。病原体は複雑な進化史を有しており、分子時計の速度が変わりやすい。現代DNAのみで分岐年代を推定することの難しさはここにも現れているのであった。そもそも、現状としては遺伝学から推定された分岐年代よりも放射性炭素年代測定の方が確実性が高く、分岐年代は年代測定の結果を用いて補正されている。澤藤氏はしたがって、病原体の起源（年代と地域）を遺伝学から決めるのは難しいとしながらも、分野の進歩速度の速さに鑑みれば、10年後にはどうなっているか分からないということも加えている。古代DNA分析によってある程度の確実性を持って言えることは、その試料が存在する時代・地域に特定の系統の病原体がいたという事実なのである。

その後は研究事例として、最も古代DNA解析が多いペスト菌 (*Yersinia pestis*) について最新のプレプリント論文¹が紹介された。既知の古代DNA184サンプルと現代DNA586サンプルを併せたメタ解析では、黒死病の系統が出現したのは1214年から1315年の間とされている（起源地は不明）。では病原体の系統や起源を論じる様々な論文の主張をどのように捉えれば

1 <https://doi.org/10.21203/rs.3.rs-1146895/v1>

よいのか。澤藤氏は判断の指標として、1) 古代の試料を含むか、2) 試料数は多いか、3) ゲノム全体を解析しているか、の3つを挙げ、2010年代のNGSの登場を画期としている。次に梅毒研究の事例が示される。この疾病は3種に分けられるがその症状はいずれも骨にまで進行するため、古人骨からの推定が可能となっている。梅毒研究に関しては、特に性病性梅毒がコロンブスによってもたらされたのか否か、つまり1493年より前にヨーロッパに存在していたか否かが議論の争点となっている。現代DNAの研究の例としてコロンブス説を支持するものが紹介されたが、これは—多く引用されつつも—古代試料を用いずNGS以前のものであるために現在では参考にならないとのことであった。最近の古代DNAによる梅毒研究²としては、ヨーロッパ北部出土の4つ古人骨からゲノムが解析され、そのなかの1つが性病性梅毒であり、その年代幅が1434～1635年であることが示され、それによってコロンブス説が否定されている。しかし澤藤氏はこの主張の根拠となっている試料の年代が必ずしもコロンブス以前とは限らず、むしろ確率的にはそれよりも後の可能性が高いことを指摘している。今後の議論の深化のためには、より古い時代の骨をDNA分析し、その系統を確認することが必要であるとのことであった。

その後の総合討論でも、テクニカルな質問から進路に関わる相談まで活発な応答が為された。この機会がさらなる文理協働のきっかけとなることを願う次第である。最後に、このセミナーの開催にあたって主催・共催の形で御協力いただいた松本氏、瀬口氏、宮崎氏、司会を務めて下さった廣川氏、そして何よりも御講演いただいた水野氏と澤藤氏にあらためて深く感謝申し上げます。

◆ 学会カレンダー ◆

2022年	3月20-21日	日本中央アジア学会2021年度年次大会 オンライン開催 http://www.jacas.jp
	3月30日	2021年度日本スラヴ学研究会研究発表会 オンライン開催 https://www.jsssl.org
	3月30日-4月2日	O22 ABS (The Association for Borderlands Studies) Annual Conference 於デンヴァー https://absborderlands.org/meetings/annual-meetings/
	4月8-10日	BASEES (British Association for Slavonic and East European Studies) Conference 2022 於ケンブリッジ大学 https://www.baseesconference.org
	5月4-7日	26th Annual World Convention of the Association for the Study of Nationalities (ASN) オンライン開催 https://nationalities.org/convention/2022-convention
	6月11-12日	比較経済体制学会2022年度全国大会 於函館大学 http://www.jaces.info/info.html
	6月23-26日	CESS (Central Eurasian Studies Society) 7th Summer Conference 於世界経済外交大学 (タシケント) https://www.centraleurasia.org/conferences/summer/
	6月25-26日	日本比較政治学会2022年度研究大会 於九州大学 http://www.jacpnet.org
2022年	7月7-8日	スラブ・ユーラシア研究センター 2022年度夏期国際シンポジウム 於SRC

² <https://doi.org/10.1016/j.cub.2020.07.058>

9月 19–21 日	17th ANNUAL MEETING of the Slavic Linguistics Society (SLS-17) 於北海道大学学術交流会館 https://sites.google.com/elms.hokudai.ac.jp/sls2021/
10月 13–14 日、 11月 10–13 日	54th ASEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Annual Convention オンライン (10月) および於シカゴ (11月) https://www.asees.org/convention
10月 15–16 日	ロシア史研究会2022年度大会 於法政大学市ヶ谷キャンパス https://www.roshiashi.com/annual-conference
10月 28–30 日	日本国際政治学会2022年度研究大会 於仙台国際センター https://jair.or.jp
11月 5–6 日	ロシア・東欧学会2022年度研究大会 於新潟市内 https://www.jarees.jp
11月 12 日	2022年度内陸アジア史学会大会 於広島大学 http://nairikuajia.sakura.ne.jp/SIAS/events/index.htm
12月 14–16 日	スラブ・ユーラシア研究センター 2022年度冬期国際シンポジウム 於SRC

上記のうち一部は対面・オンライン併用です。また現時点で対面開催の予定となっている学会も、オンラインに変更される可能性があります。各学会のウェブサイトでご確認ください。

編集部だより

◆ Acta Slavica Iaponica ◆

諸事情から刊行が遅れた第 42 号ですが、やっと刊行されました。内容は下記の通りです。各論文等の本文は、雑誌のサイトからご参照ください。

<https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publictn/acta/42/index.html>

なお、本誌のアドバイザーボード・メンバーを務めておられたデボラ・マルティンセン教授（コロンビア大学、米国）が 2021 年 11 月に他界されました。マルティンセン先生はロシア文学の優れた専門家として、投稿論文の査読や書評の依頼など、非常に積極的にご助言くださいました。マルティンセン先生に改めて心から感謝を申し上げるとともに、先生のご冥福をお祈り申し上げます。

次号の締め切りは 2022 年 7 月 17 日（日）です。ふるってご投稿ください。また、次号からは長縄研究員が編集長を担当します。引き続きどうぞ宜しくお願いいたします。[野町]

ARTICLES

Irina du Quenoy

An Unlikely Reconciliation: The Path of the Russian Orthodox Church Outside of Russia toward Canonical Union with the Moscow Patriarchate

Gennadii Korolov

Between Intermarium and Eastern Switzerland: Belarusian and Ukrainian Federative Projects, “Imperializing Nations,” and the Making of National Territories (1914–1920)

- Tomasz Wicherkiewicz Letters of Freedom and Captivity: Scriptal Planning and Language Ideologies in Baltic Central-Eastern Europe
- BOOK REVIEWS
- Jasmina Gavrankapetanović-Redžić Mitja Velikonja, *Post-Socialist Political Graffiti in the Balkans and Central Europe* [Southeast European Studies] (London and New York: Routledge, 2019), 226 pp.
- Борис Ланин Alexandra Popoff, *Vasily Grossman and the Soviet Century* (New Haven: Yale University Press, 2019), 424 pp.
- Cathie Carmichael Angela Jianu and Violeta Barbu, eds., *Earthly Delights: Economies and Cultures of Food in Ottoman and Danubian Europe, c. 1500–1900* (Leiden: Brill, 2018), 535 pp.
- David Wolff Tatiana Linkhoeff, *Revolution Goes East: Imperial Japan and Soviet Communism* (Ithaca, NY: Cornell University Press, 2020), 281 pp.

会 議

◆ センター協議員会 ◆

2021 年度第 7 回 10 月 18 日（月）～ 22 日（金）【メール開催】
議題

1. 外国の機関との協定について

2021 年度第 8 回 11 月 29 日（月）【オンライン開催】
議題

1. センター長候補者の選考について
2. 助教の再任について

2021 年度第 9 回 12 月 6 日（月）～ 8 日（水）【事務室内での投票】
議題

1. センター長候補者の選考について
2. 助教の再任について

2021 年度第 10 回 2 月 18 日（金）【オンライン開催】
議題

1. 令和 4 年度・客員研究員の採用および称号付与について
2. 内規等の改定について
3. 教員人事について
4. 剰余金による事業計画の策定について

◆ センター共同利用・共同研究拠点運営委員会 ◆

2021年度第1回 11月8日(月)【オンライン開催】

議題

1. 共同利用・共同研究拠点の活動について
2. センターの今後の活動について(意見交換)

2021年度第2回 1月25日(火)【オンライン開催】

議題

1. スラブ・ユーラシア研究センター共同研究員の選考について

◆ センター共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会 ◆

2021年度第1回 1月25日(火)【オンライン開催】

議題

1. 共同利用・共同研究公募課題の審査について

みせらねあ

◆ 専任研究員消息 ◆

ウルフ・ディビット研究員は、11月14日～3月9日の間、資料収集のためアメリカに出張。
野町素己研究員は、1月23日～4月20日の間、資料収集のためアメリカに出張。

編集後記

ロシアのウクライナ侵攻で、センターの日常も一変し、皆、情勢に心を痛めながら忙しく過ごしています。4月からは野町素己・新センター長のもとで心機一転、さらに充実した活動に取り組んでいきたいと考えています。

目 次

研究の最前線	1
長縄宣博教授が日本学術振興会賞と日本学士院学術奨励賞を受賞／ロシアによるウクライナ侵攻への対応／「生存戦略研究」の始動／令和4年度からの共同利用・共同研究拠点に継続認定される／2021年度冬期国際ワークショップ「権威主義的統治の制度と戦略」開催／【北大総合博物館展示】「ボーダーツーリズム」リニューアル／連携セミナー「ロシア極東：対中国最前線を見る」の開催／ArCS IIの最初の研究成果の発表／ArCS II 社会文化課題セミナーの開催／2022年度外国人招へい教員（外国人研究員）の決定／2020・2021年度外国人招へい教員の来日中止／専任研究員・助教・非常勤研究員セミナー／研究会活動	
『戦争と平和』の翻訳について	13
by 望月哲男	
アフアナシイ・セリシチェフの手稿『南スラブ語群』をめぐって	16
by 野町素己	
三谷恵子先生のご逝去を悼む	21
by 野町素己	
哀惜 岡奈津子さん	23
by 宇山智彦	
学界短信	26
「人文学のための古代DNAセミナー」報告記 by 諫早庸一 学会カレンダー	
編集室だより	30
<i>Acta Slavica Iaponica</i>	
会議	31
センター協議員会／センター共同利用・共同研究拠点運営委員会／センター共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会	
みせらねあ	32
専任研究員消息	
編集後記	32

2022年3月31日発行

編集	宇山智彦
編集協力	井上岳彦
DTP 編集	ささやめぐみ
発行者	岩下明裕
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北9条西7丁目 Tel.011-706-3156、706-2388 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/
